

2026 AUTOBACS SUPER GT Round6 SUGO GT 300km RACE



apr LC500h GT

apr
Racing Constructor

2026 AUTOBACS SUPER GT Round6 SUGO GT 300km RACE

開催地：スポーツランドSUGO（宮城県）／3.586km

9月19日（予選）

天候：曇り コースコンディション：ドライ 観客数：11,100人

9月20日（決勝）

天候：曇り コースコンディション：ウェット／ドライ 観客数：19,000人

ブリヂストン勢最上位の15位。値千金の1ポイントを獲得

スポーツランドSUGOはドライバーの技量を試す攻略しがいのあるコーナーが続く一方、コース幅の狭さゆえにオーバーテイクの難易度が高く、非常にチャレンジングなサーキットだ。全長が短いため、GT500とGT300のマシンがコース上に混在しやすく、セーフティカーやピットインのタイミング次第ではバックマーカー絡みの展開も起こりやすい。

また、9月上旬のスポーツランドSUGO周辺は最高気温30℃を記録する日もあったなか、この週末から始まるシルバーウィークの間に大型で強い台風25号が東北地方へ接近するとの予報も出ていた。昨年にはコースアスファルトが全面改修（再舗装）されたが、「まだ完全にはラバーが乗りきっていない状態」というのがブリヂストンの見解であり、タイヤの選択が難しい状況にあった。

それでも、31号車 apr LC500h GTにとっては相性が良いサーキット。サクセスウェイトが厳しくとも、開幕からの連続入賞を狙いに行くラウンドになる。

公式練習／20位 9月19日（土） 10:30～12:20

公式練習開始時の気温は22℃、路面温度は23℃。朝からの雨は公式練習直前に止んだが、路面にはウェットパッチが残るコンディションだった。

31号車はコースコンディションの回復を待ち、スタートからおよそ10分後にドライタイヤを履いてコースイン。まずは小高一斗がアウト、インでコース状況と、持ち込んだタイヤやセットアップを確認する。セットアップは前戦鈴鹿で見つけたバランスをベースとしていたが、すぐにSUGOの定番セットに戻した。

セットアップを調整した小高は、計測6周目に1分19秒171を記録し、この時点で18番手。今回、GT300クラスのブリヂストンユーザーは、夏の富士で好感触だったスペックの派生タイヤを持ち込んでいたが、やや硬めの印象だった。ピットに戻ってセットアップを調整し、再び小高が試走した。

13周目からは小山美姫がステアリングを握るが、このタイミングで霧雨が降り出したためピットへ。その直後にはGT500車両のクラッシュがあり赤旗中断。車両の回収とタイヤバリアの修復が行われ、17分後に再開となった。

小山はウェットタイヤを履いてコースインするが、レコードラインは乾き出していたことからピットに戻り、新品のドライタイヤに交換。そのままGT300専有走行の時間となり予選シミュレーションを開始するが、路面コンディションは回復せず、タイムアップを果たす車両はほとんどなかった。小山のタイムは1分19秒807。小高の6周目が31号車のベストタイムとなり、20番手で公式練習を終えた。



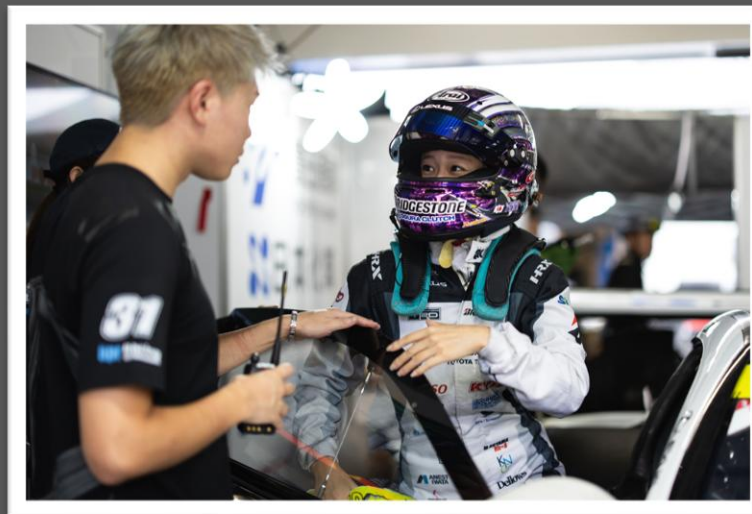
公式予選 9月19日（土）
Q1 A／3位 14:30～14:40
Q2／16位 15:23～15:33

予選開始時のコンディションは気温23℃、路面温度28℃のドライ。31号車は予選Q1のA組に出走。Q1担当は小高だ。

小高はタイヤをじっくりと温め、計測4周目にアタック。タイムは1分17秒533。タイミングとしては最後のアタッカーとなり、逆転の3番手タイムでQ2進出を果たした。

Q2の小山も計測4周目にアタックし、タイミングモニターの13番手につける1分18秒152をマーク。翌周もアタックを続け、セクター1とセクター3では自己ベストを刻んだが、1分18秒158でタイムアップはならず。予選結果は16番手となった。

予選時の路面温度は公式練習から5℃上昇したが、タイヤの最適な温度レンジには届いておらず、Q1、Q2ともに走行後のタイヤにはグレイニング（ささくれ）が起きていた。16番手グリッドからの巻き返しには、この対策が課題となる。決勝は雨の予報も出ているが、Q1を3番手で突破した小高の走りを決勝につなげたいところだ。





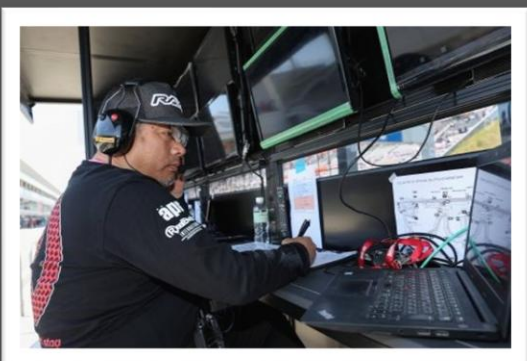
小高一斗選手

「今回は持ち込んだタイヤが合っていませんでした。去年、SUGOは路面が再舗装されたことで、タイヤの選び方も変わったのだと思います。公式練習の感じだと、予選はQ1通過がギリギリという状況だったので、Q1は僕が担当しました。ウォームアップの感触は公式練習のときにつかんでいて、1周のアタックでまとめることができました。ただ、ハイポイントコーナーとレインボーコーナーはよく曲がる印象でセクター2は速かったのですが、逆にほかが曲がらなくて……。決勝は雨が降ってくれたほうが、チャンスは広がると思います」



小山美姫選手

「公式練習のときからタイヤがグレイニングしやすい状況だったのと、Q1での小高選手のアドバイスもあって慎重にウォームアップしました。それでもフロントタイヤのグリップは出てこず、まだタイムアップの余地があると思って2アタックしました。セクター3は左、左のSPコーナーなのでタイムを更新できましたが、左のフロントタイヤは一瞬でピークを過ぎてしまっていて、ラップタイムを上げることはできませんでした。同じブリヂストンユーザーが予選4番手を獲っているの、厳しいなかでもうまくやれていればもっと上のポジションを獲れたと思うので、もうちょっと自分の走りでできることがあったのかなと思います」



金曽裕人監督

「今回、GT300クラスのブリヂストンユーザーは、全車がもっと高い気温を想定したタイヤを持ち込みました。タイヤがコンディションにマッチしていないなかで、セットアップでできる限りのアジャストをしましたが、やはり限界はありますね。その状況でもQ1で3番手タイムを出した小高選手は、やっぱり天才！ SUGOはオーバーテイクにくいサーキットなうえに、サクセス給油リストラクターによって給油時間がプラス10秒かかるので、もっと前の位置からスタートしたかったというのが本音ですが実力以上は望めないなので、気持ちを切り替えて、明日の決勝は1ポイントでも獲れるレースをしたいですね」

決勝レース（80周）／15位 9月20日（日）13:30～15:29

小雨が降り続いた決勝日の午前中。12時00分からのウォームアップ走行（20分間）はウェットで始まったが、直前に雨が止んでいたため、レコードラインは次第に乾いていった。

決勝のコンディションは気温23℃、路面温度25℃。レコードラインがドライアップしたことで、全車がスリックタイヤを装着。しかし、路面には濡れた箇所も残るため、セーフティカー（SC）スタートとなった。

スタートドライバーは小山。SC先導からレースがスタートしたのは5周目。31号車は給油時間のプラス10秒を補うべく、タイヤはフロント2輪のみの交換を予定していた。そのため小山はタイヤを労りつつ、燃費も意識した走行を続け、16番手をキープしていく。だが、それでもタイヤの消耗は激しく、徐々にポジションを落とし、23周目のヘアピンコーナーでは後続車に追突されてコースオフ、24番手まで後退してしまった。

SCスタートに加え、26～32周目にもクラッシュに伴うSCが導入されたこともあり、第1スティントはタイヤが限界を迎えるまで引っ張る戦略を採った。小山はライバルとのピットタイミングの違いもあって8番手に浮上し、39周目にピットイン。

給油とフロント2輪の交換を行い、小高をコースに送り出す。完璧なピットワークでオーバーカットを成功させ、小高は17番手でコースに復帰。全車がルーティンピットを終えた48周目には16番手に浮上した。タイヤが厳しい状況にあるなか、小高は前を追い、後続車からポジションを死守し続ける。そして残り3周に迫った78周目、タイヤの消耗で失速したライバルを抜いて15番手に浮上。そのままチェッカーを受けた。

結果として、ブリヂストンユーザーが苦戦したラウンドとなったが、31号車はブリヂストンユーザー最上位となる15位でフィニッシュ。苦しみながらも開幕から5戦連続で入賞を果たした。ドライバーズランキングはふたつポジションを下げて9位となったが、タイトル争いに向けて貴重な1ポイントを獲得した。





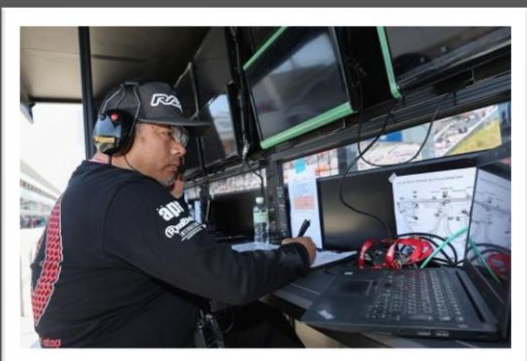
小高一斗選手

「後方からのスタートで、抜けないSUGO。タイヤが路面温度にマッチしていないこともあり、15位入賞は難しいと思っていました。実際、決勝中のフロントタイヤは厳しかったです。それでも、第1スティントを引っ張る作戦と完璧なピット作業がうまくって、入賞できました。ブリヂストンユーザーのなかでトップだったというのはポジティブなことですし、今回の逆境を乗り越えられたのは優勝したのと同じくらいの嬉しい気持ちですね」



小山美姫選手

「SC先導中はムービングやウェービングをせず、丁寧にタイヤを温めていきましたが、結構早い段階でフロントタイヤはタレ始めていました。ペースもあまり良くなかったんで、抜かれないことに集中していましたが、後部を追突されコースオフしてしまって24番手まで落ちました……。でも、終わってみれば15位でもブリヂストン勢ではトップで、ノーポイントゾーンにいたところから1ポイント獲れたのは大きいと思います」



金曽裕人監督

「持ち込んだタイヤが、今回の低温路面コンディションにはミスマッチだったことがすべてで、狙いが逆にただけのこと。天気だけは仕方ないですね。それと予選16番手というのも痛く、ここ3戦は全く同じパターンで土曜日に決勝結果が読める厳しい状況。中団順位スタートでは接触も起きやすく、実際に追突されて一時は24番手まで下がってしまいました。それでも今回のピットワークも完璧で、見事にオーバーカットを成功させてくれたメカニックの皆様に感謝です。また、小高選手は粘り強く走ってくれて、予選も決勝も彼の頭脳プレーとパフォーマンスが光りましたね。チーム皆で手にした1ポイントです」